

Chairman's Correspondence

創業者の原点を考える

リリー文化学園創立者・初代学園長大久保久子が逝去して、6月2日で丸25年がたちます。リリー文化学園は創立76年目を迎えます。

発祥は戦後の混乱が残る中、昭和24年東京都新宿区の文化服装学院(現、文化女子大学)を卒業して若干24歳でリリー洋裁研究所という私塾を水戸市に興したことに始まります。



現在でも女性で24歳で起業する人は珍しいと思います。しなやかで、バイタリティのある女性でした。その後、昭和52年には中丸町にリリー幼稚園を開園し、それが幼少教育進出への転機になりました。47年前のことです。

自身は経済的に恵まれない幼少期でしたが、大久保久子の母は無理して、当時珍しかった「幼稚園」というところに入園させてくれたそうです。彼女はこれを生涯感謝していました。幼少期の幼児教育の影響はそれほど大きいということです。その経験から「教育とは愛である」と言う言葉が創業者の理念となり、それは「いつもあたたかく」という職員のモットーになりました。さらに大久保久子は「創造」ということの大切さを説く人でした。学校が「ファッション」という、物作りから始まったからです。それは「教育とはアイデアである」という校訓となり、私たちのもうひとつのモットー「いつもあたらしく」という言葉として生きています。

もうひとつ大久保久子が常々言っていたのは「継続は力なり」ということでした。

当学園のデザイン学校ではこの春(昔は秋の入学式もありましたので)第107回の入学式がありました。創業者は自身が参列した第80回まで、毎回学生に「小さなことも毎日積み重ねれば必ず大きな力になる」と説いていました。これはすべての学習の基本だと思います。

6月は、毎年この原点を改めて踏まえ、私たちは心新たに教育活動にまい進したいと思います。

